

[課題演習報告]

豊かな友達づくりを促進する学級活動の研究  
—「特別活動推進教師」のコーディネーター的役割を通して—

桑野美咲

Misaki KUWANO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース  
直方市立下境小学校

(2021年1月4日受理)

本研究は、学級活動(1)を中心に、子供たちが人間関係の向上に係る課題の解決にも積極的に取り組むことを目指し、特別活動推進教師(以下、推進教師)がコーディネーターとして各担任に関わることを通して、豊かな友達づくりを全校で促進することができるかを検討した。子供が学級内の人間関係の向上に係る課題に目を向け解決に至る環境づくりを行うために、推進教師が学級担任へ関わり、授業づくりの相談や研修会を行った。その結果、実施前には数値の低かった「私の学級では、お互い素直に自分の意見を言うことができる」という項目の数値が実施後有意に上昇し、豊かな友達づくりに必要な要素であるとわかった。学級担任は、推進教師に授業づくりの相談をしたことや研修に参加したことが参考になったと感じている。このことから、推進教師によるコーディネートは、子供たちの豊かな友達づくりの促進に有効な手立てであることが示唆された。

キーワード：学級活動(1)、特別活動推進教師、豊かな友達づくり、環境づくり、年間指導計画

## 1 問題と目的

### (1) 子供の姿から

所属校の子供たちは、人懐こく素直である反面、厳しい家庭環境に置かれ生活習慣の乱れが見られる子供も多い。このことが遠因となって、遅刻や欠席が多くなり学校への不適応を起こしている実態が見られる。さらに、言葉遣いが荒かったり、友達に暴力的になったりすることも多く、友達との関係をうまく作ることができない子供もいる。また、一緒に遊んだり過ごしたりする友達はいても、互いに高め合おうとする友達関係まで至っていない子供もいる。トラブルが起こった時に自分たちで話し合って解決することができず、担任が間に入って解決しなければならないことも多い。

そこで、本校の課題を解決するためには、積極的に友達とのよりよい人間関係を築こうとする子供たちの育成が不可欠であると考え。また、所

属校の重点目標には、「自他の良さを知り、より良い人間関係を築くことができる子供を育てる」とあり、豊かな友達づくりができる子供を育成することは所属校の重点目標を達成するためにも意義深いと考える。

### (2) 所属校の学級活動の指導状況から

現在、所属校には、校務分掌上特別活動担当者と学級活動担当者がいるが、特別活動担当者は特別活動の各担当(児童会活動・学級活動・学校行事)のまとめ役を、学級活動担当者は学級活動の年間指導計画の作成、授業の提案、構成的グループエンカウンター研修を行っている。しかし、校内の特別活動の推進を担当する役割はない。全国的に見ても、特別活動主任を校内に設置している学校は多くあるが、特別活動推進教師(以下、推進教師)を設置している学校はほとんどない。

また、小学校学習指導要領解説特別活動編(平成29年告示)(以下、特活解説書)には、「子供の自主性を伸ばし、学校生活を一層楽しくするため

に、『(1)学級や学校における生活づくりへの参画』に重点を置いた学級活動の指導が行われるよう工夫することが大切である。」と書かれている。しかし、所属校では、実際は学級活動(2)や学級活動(3)に多くの時間が費やされている。これらのことから、推進教師を校内に位置づけ、全校で学級活動(1)（以下、学活(1)）に重点を置いて指導することができるようにすることが必要であると考えられる。

### (3) 社会の要請から

小学校学習指導要領（平成29年告示）では、新たに前文が設けられた。そこでは、「一人一人の子どもが、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されており、特別活動の目標と合致する部分が多い。これからの社会を担う子供たちにとって必要とされる資質・能力を育むために、学活(1)の充実を図ることは重要であるといえる。

### (4) 研究主題の意味

豊かな友達づくりとは、ただ一緒に遊んだり学んだりする友達ではなく、互いに高め合おうとする友達関係をつくらうとすることである。宇留田(1976)によると、友達が困っているときには頼まれなくても援助の手を差し伸べたり、友達が怠けていけば、真剣にそのことを心配し、ときには厳しい忠告も辞さなかったりするという友達関係のことを豊かな友達といい、そのような友達関係をつくらうとする子供を学級活動の話合い活動を通して育成しようとするのである。

本研究においては、推進教師とは特別活動の推進を主に担当する教師であり、校内の特別活動推進のコーディネーター的な役割を担う教員のことである。具体的には、児童一人一人の学校適応につながる効果的な学活(1)の指導の在り方を紹介したり、児童の学校適応に関する実態把握に努め、支援を要する児童の存在や状態を確かめたり、低学年から卒業まで一貫した学級活動が実施されるように「特別活動の全体計画」や「学級活動の年間指導計画」を策定したり教職員の専門性を向上するための校内研修を実施したりする。

### (5) 研究の目的

本研究では、学活「(1)学級や学校の生活づくりへの参画」を中心に、推進教師が学級担任をコーディネートすることによって、子供たちが学級集会などの運営に関する課題だけではなく、人間関係の向上に係る課題の解決にも積極的に取り組

み、豊かな友達づくりを全校で促進することができるかを検証することである。

## 2 予備調査

### (1) 目的

学活(1)の指導状況を把握し、教員の意識や話し合ってきた議題を明らかにする。

### (2) 方法

**実施期間** 201X年6月

**対象** A小学校学級担任(15名)

### 実施方法

学活(1)の指導状況を知るための意識についての質問紙調査(報告者作成、表1)を行う。

表1 学級活動(1)についての教師の意識調査項目

1	学級活動の時間に、学級の問題(困っていることや、解決したいこと、みんなで作りたいものやしたいことなど)について話し合わせたことがありますか。
2	これまでに、学級活動(1)「学級や学校における生活づくり」(学級会)で、話し合った議題とその学年を教えてください。

### (3) 結果と考察

質問1では、6月の時点で、約7割の担任が学級活動の時間に学級の問題を話し合わせたと答えている(図1)。前年度以前も含むと、8割以上の担任が話し合わせたことがあると答えている。ここで、「ない」「その他」と答えている担任は、学級担任経験が1年目、2年目の教員である(図2)。しかし、学活(1)の時間に話し合った議題を見ると、「学級目標づくり」や「集会活動の企画」、「月目標への取り組み」が約9割を占めている(図3)。前年度以前も含め、これまでに話し合った議題を見ても、学級集会活動の企画や学校行事・月目標への取り組み等についての話合いが多く(図4)、「特定の人だけで遊んでいる」等の人間関係の向上に係る課題の解決に取り組んだ議題は16%という結果であった。

これらのことから、所属校では学活(1)に対する担任の意識に差があり、実践の内容や方法が統一されているわけではないということがわかった。豊かな友達づくりを促進する学級活動を校内で推進していくためには、推進教師がコーディネーターとして各担任に関わり、指導法を共通理解していくことが必要であると考えられる。また、議題の偏りをなくすためには、学活(1)の内容を見直してい

く必要があると考えた。

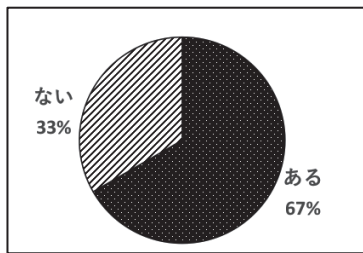


図1 質問1(学級の問題について話し合わせたことがあるかどうか, 201X年6月)

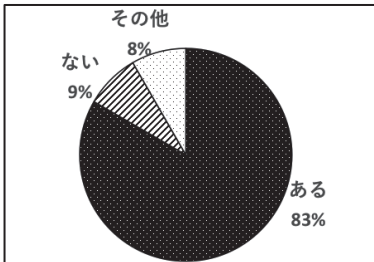


図2 質問1(学級の問題について話し合わせたことがあるかどうか, 201X年度以前も含む)

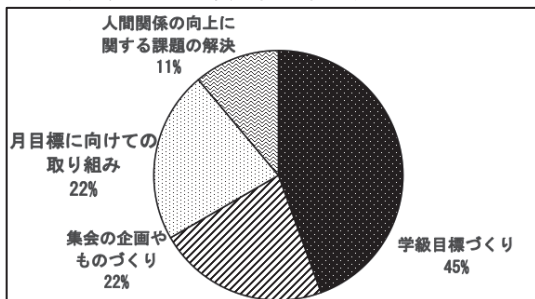


図3 質問2(学級会で話し合った議題, 201X年度6月)

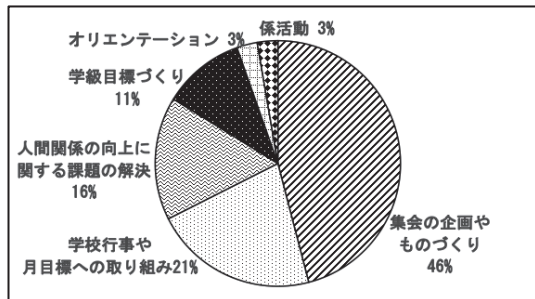


図4 質問2(学級会で話し合った議題 201X年度以前も含む)

### 3 研究I

#### (1) 目的

学級活動において、豊かな友達づくりにつながる人間関係の向上に係る課題まで話し合っ解決することができるようにするための話し合い活動を試行的に実践し、推進教師の仕事内容について情報収集するとともに、子供たちの自発的・自治的活動が児童一人一人の学校適応促進に効果があるかを検証する。

#### (2) 方法

**実施期間** 201X年5月～201X年12月

**対象** 実践群：A小学校第4学年B組児童  
(21名)

協力群：A小学校第4学年C組児童  
(21名)

#### 測定内容と測定方法

子供を対象とした質問紙は、共同体感覚尺度を小学生用に簡便化したもの(大熊, 2014)と学級活動に対する意識についての記述を授業実践の前後に行う。また、学級担任に対して、子供の姿や人間関係の変容についての聞き取り調査と学級活動に対する意識調査を行う。

#### 実践の具体的内容

##### ①子供が学級内の人間関係から生じる課題に目を向け解決に至る授業づくり

##### (ア)子供に学級内の人間関係から生じる課題に目を向けさせるための関わり

子供が学級内の人間関係から生じる課題に目を向けることができるようにするために、学級担任が朝の会や帰りの会を使って子供たちに話をした。学級目標を意識させたり、学校行事と関連させて今の子供同士の関係に目を向けさせたりするような話をした。また、報告者も休み時間や給食時間等の子供と関わる時間の中で、人間関係について意識を向けさせる話をした。

##### (イ)子供の課題を引き出すための関わり

子供が抱えている人間関係から生じる課題を引き出すために、日記を書かせた。日記には、子供が自身の思いを書けるようにするために、楽しかったことや頑張っていることを書かせることから始めた。日記を書くことに慣れてから、友達との関係や学校生活についての悩みや思いについても書かせるようにした。学級担任と報告者が日記を読み、必ずコメントを書いて返した。日記に何を書いてよいかわからない子供もいたため、その場合は学級担任と報告者が質問を書くことによって子供の思いを引き出すことが出来るようにした。

##### (ウ)人間関係の向上に係る課題を解決するための話し合い活動

学級内の人間関係から生じる課題について、子供に意識させたり日記から聞き取ったりしたことをもとに、学級会を行った。1回目の学級会では、報告者が学級担任の考えを聞き、一緒に学級会プランニングシート(脇田, 2019)(以下、学級会PS)を用いて学級会の一連の流れを考えた。2回目の学級会では、報告者が学級担任の相談に乗りなが



ら、学級担任が学級会 PS を書いて授業の流れを考えた。授業は2回とも学級担任が行い、「クラスのだれとでも仲よくなれる取組を考えよう」「学級がつまらないと感じている友達に4の1としてできることをしよう」という議題で話し合った。学級会が終わった後には、子供から出た課題について全員で話し合えたことを賞賛する声かけを行った。そして実践に結びつけるために、学級内に決まったことを書いたり朝の会や帰りの会を使って話をしたり子供の頑張りを賞賛したりした。

### ②豊かな友達づくりを校内で推進するために必要な情報収集

秋山(2014)によると、集団の形成過程には段階があり(表2)、それぞれの段階に合った教師の指導があるとされている。集団の形成過程に合った話し合い活動を行うことができるように、学級集団の形成段階に応じた議題例と、学活(1)の年間指導計画を作成していく必要がある。

表2 3段階学級集団形成モデル(秋山, 2014)

第1ステップ	教師主導期	教師が主導しながら、児童に望ましい集団活動を体験させる時期
第2ステップ	児童の自主的活動への移行期	児童の多くが集団活動になれ、自主的に活動を進めることができるようになる時期
第3ステップ	児童の自主的活動期	児童が生活の中で課題を見つけ、自主的な取り組みを計画実践することができる時期

また、特活解説書には、学活(1)における学習過程の一連の流れが図に示されている。この一連の流れに沿って、問題の発見から決めたことの実践、振り返りまでに必要な手続きを一つ一つ挙げていった。学級担任がすることと推進教師がすることを分け、学級会を行うにあたっての推進教師の仕事内容を明らかにした。

### ③教師のニーズに応じた研修会の実施

7月に、学級担任全員に対して学級活動についての意識調査を行った。意識調査の結果から、学級担任が学活(1)において、議題を設定するまでに

負担となっていることを整理すると、時間の確保が難しいこと、年間の見通しが持てないこと、議題案が子供から出てこないこと、または集会に偏ること、子供の課題意識と教師の取り寄せたいことにずれがあること、児童全員に関心を持たせることが難しいということであった。これらを踏まえ、8月に特別活動や学級活動への理解を深め、各学級担任による学活(1)の充実を図るために全職員を対象とした研修を行った。

### (3) 結果と考察

#### ①共同体感覚尺度から

実践群のB組(21名)と協力群のC組(21名)を分析対象とし、共同体感覚尺度を事前の6月と事後の12月に実施した。「所属感・信頼感」、「自己受容」、「貢献感」の3因子において、群(実践群・協力群)と時期(事前・事後)による2要因分散分析を行った(図5)。その結果、貢献感については交互作用が有意であったが協力群の有意な下降のみであり、3要因とも実践群において有意な上昇は見られなかった。しかし、3要因とも協力群は数値が下がっているのに対し、実践群では数値が上がっている。子供が学級内の人間関係から生じる課題に目を向け解決に至る実践、振り返りを行うことで、一人一人の共同体感覚が高まり、学校適応が少しずつ促進されてきているということが考えられる。

#### ②学級活動に対する意識の記述から

実践群の子供に、「あなたが、みんなで話し合いたいと思っている学級の問題はなんですか。」という質問を7月と12月に行った。7月は、「ドッジボールをしたい」「キャラクターをつくりたい」というような集会の企画やものづくりについての回答が52%、「喧嘩をなくしたい」というような人間関係の向上に関する課題の解決は13%であった。12月は、集会の企画やものづくりについての回答が15%、人間関係の向上に関する課題の解決についての回答が20%であった。人間関係の向上に関する課題の解決については、「悪口が多いから

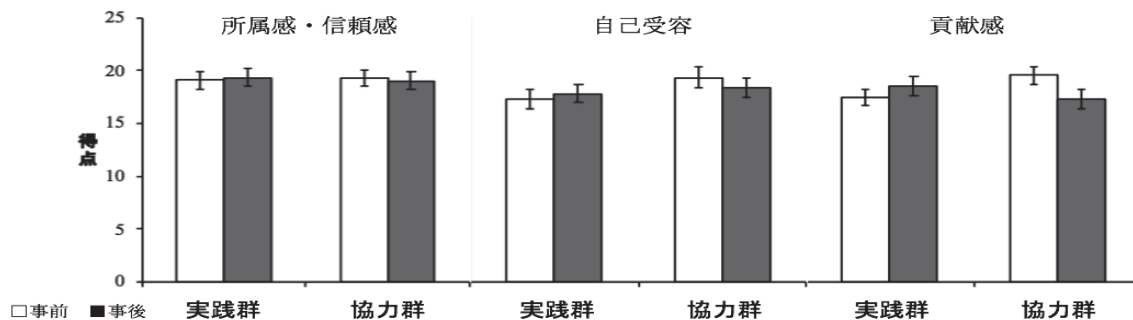


図5 共同体感覚尺度の学級平均の推移

なくしたい」「喧嘩をしないようにしたい」等の議題案が書かれていた。このことは、子供たちが学級内の人間関係から生じる課題に目を向け、解決するための話し合い活動を行ってきたことにより、自分たちで人間関係の向上に関する課題についても話し合っ解決できることに気づいている子供が増えたのではないかと考えられる。しかし、「なし」の回答が35%から65%へと増えており、学級生活向上に関する問題解決への関心の低下という課題が残った。この課題を解決するためには、子供が学級の問題に目を向ける機会を増やすことができるように、担任からの働きかけを行い、継続した取組が必要だとわかった。

### ③学級担任への聞き取りから

#### (ア)子供の姿や人間関係の変容について

学級担任に、子供の姿や人間関係の変容についての聞き取り調査を行った。すると、子供たちは、友達が不安に感じていることや苦手としていること等、特にマイナス面のことについて、これまでなかなか発言できなかったことについても発言できるようになり、他者理解が深まったという話を聞くことができた。

#### (イ)学級活動に対する意識について

学級活動については、子供たちが感じている個人の問題でも取り上げ方次第で学級会で話し合うことができるのだと感じるようになったという話を聞くことができた。教師自身が学級の実態から考える課題を取り上げて、楽しい学校生活、仲間づくりにつながる集会活動等を話し合わせることも可能ではあるが、子供たちが感じている問題をいかに教師が汲み取って必要に応じて働きかけをしながら「子供たち発信」で考えさせていくことの大切さを感じたと話していた。しかし、なかなか定期的・継続的にうまく取り入れられなかったことが反省点であると話していた。

(ア)(イ)の学級担任への聞き取りの結果から、研究Ⅰを通して子供同士の理解が深まり、それをきっかけに普段の生活でも友達のことを考えるようになってきた子供の姿も見られるようになったということがわかった。しかし、1年間を見通して実践を進めていくという点で課題が残った。

## 4 研究Ⅱ

### (1) 目的

推進教師がコーディネーターとして学校全体の特別活動を推進していくことにより、豊かな友達

づくりのために人間関係の向上に係る課題まで話し合っ解決するための環境づくりや指導計画の作成を行い、子供たちの自発的・自治的活動が児童一人一人の学校適応促進に効果があるかを検証する。

### (2) 方法

**実施期間** 201X+1年2月～201X+1年12月

**対象** A小学校全校児童

### 測定内容と測定方法

子供を対象とした質問紙は、3～6年生を対象に、「学級や学校の生活づくり」に関する測定尺度（長谷川ら、2013）を授業実践の前後に行う。1・2年生は、子供の様相観察や担任への聞き取り調査を行う。

また、学級担任に対しては、「学級や学校の生活づくり」に関する測定尺度（長谷川ら、2013）を教師用に変更したものと、子供の姿や人間関係の変容についての聞き取り調査を行う。

### 手続き

校内に推進教師を位置づけ、特別活動・学級活動担当者が推進教師も担当することとなった。推進教師は、経験年数5年目で本年度は5年生担任である。また、これまで熱心に学級活動に取り組んできている。

### 実践の具体的内容

#### ①子供が学級内の人間関係の向上に係る課題に目を向け解決に至る環境づくり

#### (ア)「学級や学校の生活づくり」に関する測定尺度の実施

6月に、A小学校の3～6年生児童を対象に、「学級や学校の生活づくり」に関する測定尺度を用いた質問紙調査を行い、児童の実態を把握した。

学校全体で見て、平均点が高い項目は「学校のきまりを守ろうと思っている(4.40)」,「学校には楽しいことがたくさんある(4.29)」,「昼休みや休憩時間は、学級の友達とよくおしゃべりをする(4.19)」であった。学校全体で見て、平均点が低い項目は「担任の先生は一緒に遊んでくれる(3.03)」,「担任の先生には何でも相談できる(3.37)」であった。学校が始まって数週間の時期の実施なので、低い結果となったと考えられる。その他、「私の学級には、安心して失敗することができる雰囲気がある(3.40)」や「私の学級では、お互い素直に自分の意見を言うことができる(3.43)」も低い結果となっていた。これらの項目は豊かな友達づくりに関連が深く、本校で研究を推進していく必要があると考えた。

#### (イ)人間関係の向上に係る課題の解決に向けた

## 学級会の実施

### a 事前の活動

7月から11月に、A小学校の学級担任を対象に、学活(1)の授業づくりについて推進教師が関わった。推進教師は、まず、必要に応じて学級担任に特別活動や学級活動についての資料を渡した。そして、集会をすればよいのではなく、人間関係の向上に係る課題の解決が必要であるということを担当に伝えた。そして、担任に学級の課題を聞き取り、議題の選定や学級会プランニングシートについて相談にのりながら、一緒に授業づくりを行った。

これまで、学級会を行う際には、議題ボックス等から子供がしたい活動について情報を収集し、それについて実践を行うことが多かった。しかし、子供の思いを引き出すだけでなく、担任から見た学級の状況を踏まえたり、担任の思いや願いを取り入れたりすることも授業づくりに大切な要素だとわかった。

### b 話し合い活動

各学級では、推進教師によるコーディネートを受け、それぞれ、表3のような学級会を行った。

この中で、3年2組の学級会は、公開授業とし、全職員で参観し、研修の場とすることができた。推進教師は学級担任であるため、全ての授業を参観することはできなかったが、どのような話し合い活動が行われたかを振り返るようにした。

5年2組の「授業中のルールを決めよう」の学級会では、「今までは勇気がでなかったけれど本当は注意したい」という発言もあり、自分の素直な思いを友達の前で伝えることができた児童もいた。

表3 推進教師が関わった学級会の議題名

学級	議題名
1-1	1年1組のみんながもっとなかよく、楽しくすごせるようにできること・したいことを考えよう
2-1	みんなで遊ぶ遊びをきめよう
2-2	みんながもっと楽しめる「みんなであそぼう」をしよう
3-1	みんなが楽しいと思える遊びをしよう
3-2	クラスみんなで仲良くするためにハロウィン集会をしよう
4-1	4-1 みんなに必要な約束とそれを守っていくにはどうしたらよいか考えよう
5-1	クラスの良さを学校に広げる方法を考えよう
5-2	授業中のルールを決めよう
6-1	みんなが楽しく過ごすためにどうすればよいか考えよう
6-2	クラス全員が、最後まで協力できる方法を考えよう

このことは、これからの人間関係の向上につながっていくと考える。その後、「発表したり課題を提出したりするとポイントがもらえるようにする」「みんなで目標を決め、達成できたらお祝い集会をひらく」ということが決まった。お祝い集会をひらくことは学活(1)の議題になり、次の活動へつなげることができた。

### ②発達の段階に応じた学活(1)の年間指導計画作成とそれを基にした全校実施

学級活動の年間指導計画や特別活動の全体計画の作成や見直しを行った。学級活動の年間指導計画は、発達段階を考慮したものになるように見直した。また、これまでの年間指導計画では、学活(1)の議題例が集会活動に偏っていたため、人間関係の向上に係る課題の解決の議題例も示した。なお、新型コロナウイルス感染症の影響による年間指導計画の変更があったため、5月に再度見直しを行い、指導計画に沿って各学年で実施した。

### ③推進教師の力量向上

現在設置されている道徳教育推進教師について、小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編(平成29年告示)を参考にし、情報をまとめ、推進教師に必要な力量を整理した。これらを年度当初に全職員へ伝えることで、推進教師が自身の役割や目指す姿を知ることができ、自己評価にも活用できる。また、他の職員も知ることによって、1年間を通して推進教師へ援助を要請することができる。管理職は、これを活用し、推進教師の評価を行うことができる。この内容は、推進教師だけが知っておくのではなく、全職員で知っておくことが特別活動を全校で推進していくために大切であると考えた。

学級活動の指導のポイントをまとめた学級会指導者用デジタルコンテンツ(脇田ら, 2020)を

表4 デジタルコンテンツの項目

A-1	学級会オリエンテーション
A-2	グッズ・座席・教室掲示・ノート
A-3	議題(集め方・議題例)
A-4	問題意識の高め方
B-1	計画委員会の組織(輪番や工夫)
B-2	計画委員会の仕事内容
B-3	計画委員会への指導
B-4	計画委員会の時間確保
C-1	助言のタイミングや内容
C-2	教師の話の観点
C-3	合意形成について
C-4	発達段階に合った指導
D-1	実践につなげることの大切さ
D-2	実践につなげる工夫
D-3	振り返りの視点
D-4	次の実践に向けた工夫



作成した(表4)。A小学校の担任に、学級活動について困っていることやもっと知りたいことについて聞き取り調査を行った。その後、他の院生や各地域の特別活動を研究している教員と役割分担を行い、項目に分けて作成した。パワーポイントや動画、写真を用いており、知りたいポイントの動画を視聴することで、学級会の段階的な指導内容を理解することができる。

作成したものは校内研修で紹介したり、推進教師が各担任をコーディネートするときに使用したりし、いつでも全職員が視聴することができるようにしている。推進教師は、デジタルコンテンツを活用することで、学級活動を推進する上で必要な情報について知ることができる。

#### ④推進教師を中心とした校内体制づくり

校内に推進教師を位置づけ、各担任のニーズに合わせて働きかけた。報告者は、推進教師の職務遂行の能力を向上させるために、必要な資料や情報の提供を行った。また、全職員に、学級活動の実践内容や効果を日々の指導に活かしてもらうための通信を発行した。

#### (3) 結果と考察

##### ①児童への「学級や学校の生活づくり」に関する測定尺度の結果から

6月の実施と同様に、A小学校の3～6年生児童を対象に、「学級や学校の生活づくり」に関する測定尺度を用いた質問紙調査を11月にも行った。実践前後の変化について、t検定を実施した。この結果の中で、有意に上昇していた項目は、「昼休みや休憩時間は、学級の友達とよくおしゃべりをする。」(図6)、「私の学級では、お互い素直に自分の意見を言うことができる。」(図7)、「私の学級では、よく喧嘩やもめごとが起こる。」(図8)の3項目であった(表5)。「わたしの学級では、お互い素直に自分の意見を言うことができる。」という項目は、6月に実施した際は特に数値が低い項目の一つであった。この項目は、互いに高め合う友達関係をつくらうとする、豊かな友達づくりと深く関わるといえる。また、「昼休みや休憩時間は、学級の友達とよくおしゃべりをする。」という項目についても、豊かな友達づくりにつながると考える。「私の学級では、よく喧嘩やもめごとが起こる。」という項目について、長谷川ら(2013)は、「実際の学級や学校生活で生じたトラブルや問題は、学級をより望ましい状態へと引き上げる契機となる可能性を秘めていたのである。」と述べており、学級活動の充実・向上により学級や学校生活への適応を促す可能性が示唆されたとしている。

今後、学級での喧嘩やもめごと学級活動を通して解決していくことが求められる。

##### ②教師への「学級や学校の生活づくり」に関する測定尺度の結果から

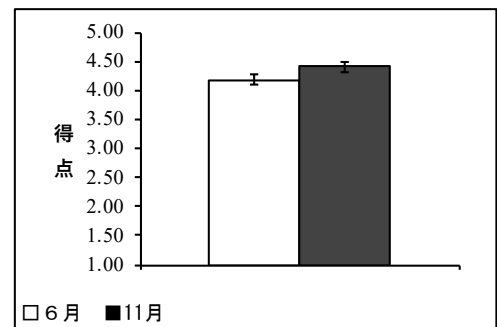


図6 「昼休みや休憩時間は、学級の友達とよくおしゃべりをする。」の結果

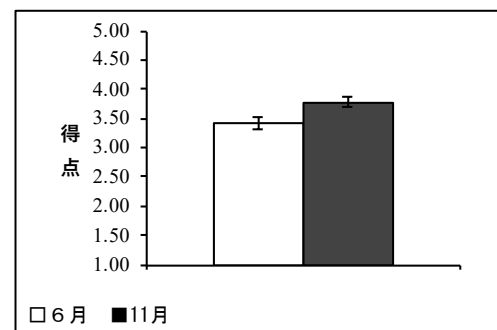


図7 「私の学級では、お互い素直に自分の意見を言うことができる。」の結果

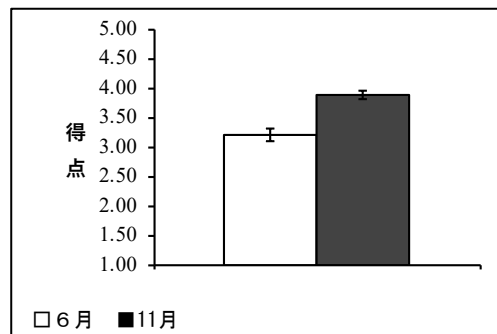


図8 「私の学級では、よく喧嘩やもめごとが起こる。」の結果

表5 t検定の結果有意差が認められた項目

項目	6月	11月	df	t値
昼休みや休憩時間は、学級の友達とよくおしゃべりをする。	4.18	4.4	168	2.28 *
私の学級では、お互い素直に自分の意見を言うことができる。	3.41	3.78	168	3.20 ***
私の学級では、よく喧嘩やもめごとが起こる。	3.2	3.88	167	5.85 ***

(\* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001)

A小学校の学級担任を対象に、「学級や学校の生活づくり」に関する測定尺度を教師用に変更したものを用いた質問紙調査を実践前後に行った。変化についてt検定を実施したが、有意な変化は認められなかった。推進教師が担任に対してコーディネートをした回数に限られていたためである

と考える。年間を通して、計画的に推進教師によるコーディネートを行う必要があると考えた。

### ③教師の学活(1)の振り返りの結果から

学級担任に、今年度の学活(1)について振り返る、記述式の質問紙調査を行った。学活(1)を行ってよかった点は、「『みんなで遊ぼう』の時に抱いていた不満やうまくいかない原因を出し合うことで、問題点を全員で共有することができた。」「正直に思っていることを伝え合うことができた。」「うまくいかなかったクラスの中での子供たち同士の課題を解決しようと、子供たちが自主的に考えることができた。」等というように、子供たちが課題を解決するために考え、伝えあったという意見が多くあった。これは、児童への「学級や学校の生活づくり」に関する測定尺度の結果で有意に上昇していた、「わたしの学級では、お互い素直に自分の意見を言うことができる。」とも関わっているといえる。他にも、「普段あまり接点のない子どもも楽しく遊ぶ姿が見られた。」という記述もあった。「昼休みや休憩時間は、学級の友達とよくおしゃべりする。」の項目が有意に上昇していたことは、このような学級担任の記述からも明らかになった。

推進教師との関わりについては、「困っていることをすぐ相談できて、一緒に考えていただいた。」「アドバイスをもらうことで、違った見方ができ、授業改善につながった。」のように、学級会について相談できたことについて回答している教師が9人中7人おり、学級担任にとって効果的であったことがわかった。また、「授業公開や研修をひらいていただき、実践へのヒントをいただけたと思う。」という意見もあり、推進教師による研修も学活(1)の授業づくりにつながったことがわかった。

しかし、クラスをよりよくするために学級会をするという意識をもたせることができていないことや、クラスの課題に気づくことができない子供がいることが課題としてあげられ、子供の学級会への意識を変えていくことも必要だとわかった。

## 5 総合考察

研究Ⅰ、Ⅱを通して、推進教師がコーディネーターとして学校全体の特別活動の推進をすることは、豊かな友達づくりに必要な、子供同士の関わりや素直に自分の意見を出し合うことの向上に一定の効果があることが示唆された。しかし、子供たちが課題に目を向け、自主的に解決しようとするようになるまでは至っていない。今後、特別活動を全校で継続して推進していくことで、さらに

学活(1)を充実させ、効果を検証していく必要がある。

また、学級担任が、学活(1)を子供の人間関係の向上に係る課題の解決のための時間として捉え、継続して実施していくためには、今後も推進教師がコーディネートしたり、学級会指導者用デジタルコンテンツを活用したりすることが必要であると考えられる。本研究では、推進教師は学級担任であり、全ての学級の授業を参観することは難しかったため、今後は、教務主任等と連携しながら、学校全体の学活(1)の実施状況を把握する必要もある。長谷川ら(2013)は、各学級で様々なトラブルや問題の発生が生じ、教師はその変化に対応しながら学級経営、学級づくりを行っていくことが求められるが、その学級の変化の把握が重要な課題であると述べている。学級担任が一人で学級の変化を把握するのではなく、推進教師も一緒に変化を把握し、学級活動を通して解決する方法を考えていくことは、子供の人間関係向上や豊かな友達づくりに役立つといえる。今後、さらに学校全体の様子を把握するために管理職等と連携し、相談しやすい環境づくりを行うことも必要であると考えられる。

## 使用ソフトウェア

Thinkboard Contents Creator 2012 教育情報サービス  
学級会指導者用デジタルコンテンツ 2020 脇田, 柳井, 桑野, 門司, 野中, 小島, 西村, 那須, 井上, 古賀, 竹ノ上

## 主な引用・参考文献

秋山 麗子 2014 特別活動を中心にした小学校の学級集団形成に関する研究 教育学論究 6 195-207  
長谷川 祐介・太田 佳光・白松 賢・久保田 真功 2013 小学校における解決的アプローチにもとづく学級活動の効果-測定尺度開発と学級・学校適応に与える効果の検討- 日本特別活動学会紀要 21 31-40  
宇留田 敬一 1976 学級会活動の改造 明治図書

## 謝辞

本研究に際し、機会を提供してくださった福岡県教育委員会及び北九州教育事務所、直方市教育委員会、また、在籍校や協力校の校長先生をはじめ、ご協力していただいた全ての先生方に、心より感謝申し上げます。